この紅魔の幼女に聖剣を！

海洋竹林

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅魔族ものですが、転生要素ありです。頭を空っぽにして読んでいただければ幸いです。

最近忙しいので毎日投稿はできなさそうです。

目次

この素晴らしい転生にチートを！
1
このフラグの乱立を！ ―――― 8
この紅魔の少女に憧れを！ ―― 12
この厨二の里に邪神の加護を！ ― 17
この紅魔の幼女に飛び級を！ ―― 22
この紅魔の幼女に学校を！ ―― 27
この生徒達に一時間目を！ ―― 31
この生徒達に二時間目を！ ―― 37
この生徒達に三時間目を！ ―― 43
この生徒達に四時間目を！ ―― 47
この生徒達に自習時間を！ ―― 55
この紅魔の姉妹の帰宅を！ ―― 60
この紅魔の少女に新たな名を！ ― 68
この古代遺跡に探索者を！ ―― 74
この怠惰の化身とお喋りを！ ―― 79
この荒ぶるモンスター達に鉄槌を！
83
この悪魔にご主人様を！ ―――― 89

この素晴らしい転生にチートを！

どうやら、自分は死んだようだ。

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を案内する女神。××さん、あなたは本日午後19時37分に亡くなりました。辛いでしょうが、あなたの人生は終わったのです」

ここはひたすらに暗い空間で、目の前には女神を名乗るどう見てもパッドの女性がいる。普通ならパッドの女性の頭を疑うところだが、実際自分には死んだときの記憶が残っているのだ。

それは、主観的にはつい数分前の出来事だった。

取引先の無茶な注文とそれによって発生したデスマーチによる三徹によって意識が朦朧としていた自分は、眠気に耐えかねて屋上の自販機で買ったブラックコーヒーを飲んでいた。

「眠い……。ああ、しっかりしなくては。」

頬を叩いて眠気を払った自分は、飲み終わったコーヒー缶をごみ箱に捨てると階段を

降りようとしたのだ。
　しかし、どうやら自分の肉体はその無茶に耐えてはくれなかったらしい。鈍い鈍痛とともに視界が揺れ、見えるのは迫るリノリウムの床。あの階段は施設管理部に相談が行くほど急な階段であり、たとえ即死を免れ病院に運び込まれたとしてもあの時の体力からすると、頭部に損傷を負った自分は目覚めることはないだろう。そのことを思い出せば、このパッドの女性の言にも信憑性が出るというものだ。
　いや、たとえ女神とはいえ自分の体形をパッドで誤魔化すような奴の言葉を信用してもいいのか?
「信用しても大丈夫です!というかさっきからパッドパッドと、あまり連呼しないでください!!」
　女性はそういうとパッド、いや胸を自分の視線から隠すようにして抱いた。
　いや、でもパッドだしなあ。
「パッド差別はいい加減にしてください!!」
　さっきからそうだが、私は口に出していないはず。やはり女神だけあって、心を読むとか楽勝なのだろうか。自分の薄っぺらな精神なんてシースルーレベルで丸裸だったりするのだろうか。
「全部口に出してます!というか、今まで無意識だったんですが!?」

元気のいい人だ。何かいいことでもあったのだろうか。しかし、今まで考えたことすべてが口に出ていたというのなら、やはり謝らなくてはいけないだろう。あんなに巨乳に見えるパッドをつける女性なのだ。さぞかし自分の体形に自信がないのだろう。そんな虚乳、いや貧乳であろう彼女に対し、自分はパッドと連呼してしまった。

なんてことだ……！これではまるでクズではないか!!私はクズにはなりたくない。やっぱり謝っておくべきだろう。そうと気まれば早速！早急に!!謝ろうではないか!!!

「すまん！パッドの女性!!」

どうだ……？

「もういいですからその呼び方やめてください!!無意識とか関係なかったんですねその呼称！……もう、私はエリス。幸運の女神エリスといいます。そう呼んでくださいね。」

幸運の女神エリスは快く許していた。やはり女神か……！

「それで、どうして自分はここにいるのだろうか。」

幸運の女神が死者を担当するなんて、神の世界も人手不足なのか……。

「違います。というか、また口に出てますし。」

おっと失敬。しかし人手不足ではないとすると、なぜ彼女が自分を呼んだのだろうか。死者何千億人目記念とかで異世界転生でもさせてくれるのか……？そう聞いてみると幸運の女神エリスは少し驚いたような顔をして、

「そんな愉快な企画ではないですが、異世界転生というのはその通りです。××さん、死んだあなたには三つの選択肢が与えられます。一つは、天国で老人のように穏やかな生活をすること。二つ目は、記憶を消してまた新しい人生を赤ん坊から生きなおすこと。そして最後は、私が担当する世界に記憶とチートをもって転生することです。」

　チート転生。それは男の夢であり、厨二病を患ったことのあるものなら誰もが一度は妄想するもの。かく言う自分もその口であり、異世界転生という選択肢にはすぐに飛びついた。

「なるほど。自分の世界に転生してくれる人間を見に来ていたということか。勤勉だな。」

「いえ、ただ単に地球担当の先輩が仕事を貯めて手伝わされているだけなんです。」

　照れたのか顔を赤く染めて白状する幸運の女神エリス。神の世界、天界にも上下関係は存在するらしい。確かに自分も学生時代には先輩に理不尽な命令を出されたこともある。

　大変だな……!

「そ、そんな同情の視線で見つめないでください。それで本当にいいんですか!?まだ説明の途中だったんですけど。」

それもそうか、確かに説明はすべて聞かないといけないな。
「それでは聞いてやろう。その世界の感動的かつ深刻で重要な事情とやらを!!」
「ハードルを上げないでください!!」
涙目で怒られた、解せぬ。

なるほど、魔王軍が強すぎてあんな過酷な世界に生まれなおすなんて嫌だという軟弱な魂が増えて世界全体の人口が緩やかにだが下がりつつあると。昔から転生者をチート付きで送り込むことはしていたらしいが、最近の人口減少によって何百年か前からかずうちゃ当たる方式でチート持ちを送り込み続けていると。
「しかし、その間誰も魔王を討伐できなかったのか?」
「ええ、私たち女神が世界に干渉できるレベルでは倒せないほど魔王は強く、いまだ魔王討伐に至った人は数人しかいません。」
それは転生者が弱いのか、チートといってもあまり理不尽な物は送れないのか。
「どちらかといえば後者ですね。転生者の方はこの世界の一般的な人よりも才能がありますが、魔王はそれ以上の強さを持っています。」
一つ、思いついた。
「なあ、制限をつけて限定的な状況でしか全力を発揮できないようにすれば、強力なチー

トを送れるのではないか?」
「なるほど……!!」
　どうやら考えたこともなかったらしく、すごい驚かれた。
「じゃあそんな感じのチートをくれ。」
「えっと……、今まで誰も考えたことがなかったので在庫にないんです。」
　結局一緒に内容を考えることになった。

　決まった……! いや、本当に長かった……! 結局話し合いは長時間にわたって行われ、ようやくいくつかのチートがまとまった。
「ありがとうございます。まさか、他のチートも考えてくださるなんて……。」
　幸運の女神エリスからの感謝を受け取りつつ。自分は最初に決めたチートをもって転生することを伝えた。
「そうですか……。本当にありがとうございました。なにかお礼ができればいいんですが……。」
　それならと、一つ頼みごとをしてみた。
「えっ!そんなことでいいんですか?大丈夫ですけど……。」
　自分と同じ頼みごとをしてきた転生者はあまりいなかったらしく、幸運の女神エリス

は大変驚いていた。それでもそれがいいと言うと、幸運の女神エリスは珍しがりながらも納得してくれた。

「それでは××さん、これより転生を始めます。あなたによき人生を。」

幸運の女神エリスの笑顔とその言葉とともに、自分は異世界へと転生した。

このフラグの乱立を！

自分……いや、私が転生してから数年の時がたった。私が転生前に幸運の女神エリスに頼んだのは、この世界に一人の赤子として生を受けたいということ。疲れ切っていたから十数年は働きたくないと思い頼んだのだが、自分自身が制御できない赤子というのもなかなかに疲れる体験ではあったと思う。

私は紅魔族という種族に転生した。紅魔族という種族について特徴上げるなら、まずはその圧倒的な知力と魔力が上げられるだろう。その能力ゆえに、この紅魔族の里は魔王の居城のほど近くにあって襲撃を度々受けながらも追い返すことができ、この国の魔王軍に対する最終兵器として名が知られているらしい。

そしてそれら魔法使いとしての才能の他にもう一つ、紅魔族には大きな特徴がある。それは、種族全体が厨二病であるということだ。この世界において独特な感性、つまりは厨二病的感性をもつ彼らはそれ故に自重というものを知らない。だからかこの里の周辺には危険なモノがたくさん封印されており、しかもそれらの殆どは態々他所から封印を暴いて拉致し、この近くに封印しなおしたものらしい。はた迷惑な話だが、なんでもそれが格好いいのだとか。

「まりとら、めぐみん！ご飯よ～。」

我が母ゆいゆいに呼ばれてリビングまで行くと、テーブルの上には焼いたネギが全員分並べてあった。

「わがははゆいゆいよ、そだちざかりのわがあねめぐみんのほうがたくさんたべるから、わたしのぶんをはんぶんわがあねめぐみんにたべさせてあげてほしい。」

「まりとら、お腹が空いているとはいえ妹の分をとったりはしません。」

そんなことを言いつつも期待によだれを足らす我が姉めぐみんの口に、私は半分に折ったネギを差し込んだ。

朝食を食べると、私は近所の森の中で一人の女性と合流した。彼女の名前はそけっと、この国一番の占い師である彼女は、修行が趣味の戦闘狂である。

「おはようまりとら、今日もついてくるの？」

「きょうはわがあねめぐみんにちょうしょくのはんぶんをゆずったのだ。わがしそけっとがごはんをくれないとわたしはがししてしまう。」

腹を鳴らしながらいつものようにそう言うと、我が師そけっとは苦笑しながら焚き火で焼いていた肉を私にくれた。

「いつも美味しそうに食べてるけど、調味料も使わないで飽きないの？」
「くうふくはさいこうのすぱいすともいう。それにこうまのさとふきんのれべるのたかいもんすたーはやいただけでもうまいからな、あしたはいちげきぐまがたべたい。」
「はいはい、明日もちゃんとあげるから。」
　一撃ウサギの肉を食べて明日の一撃グマを予約すると、次は我が師そけっととの修行である。私の貰ったチート、聖剣エクスキャリバーはどこからか召喚できる、ビームを撃てる、壊れないなど幾つもの能力を持つがその名の通り剣なので、修行しないと使えないのだ。

　我が師そけっととの修行を終えて昼食のおにぎりを食べると、私は里の近くにある古代遺跡へとやってきた。これも私の日課の一つであり、この場所は私の秘密基地として利用させてもらっている。しかしまだまだ未発見区画が多くあり、日々そこを探索しては地図に書き込んでいる。
　しばらく未発見区画を探索しながら地図に書き込んでいると、電子ロックを見つけた。
『この扉はメラゾーマじゃない火の玉で開く』

どうもこの古代遺跡は過去に転生してきた転生者が作ったものらしく、電子ロックは現代日本人でしか知らない内容が多い。現にこのメラで開く扉以外にも、くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐで開く扉や、ピカチュウで開く扉もあった。どうも制作系のチートを持っていたらしく、色々な古代兵器が安置されていた。……そういえば女神や邪神、破壊神をも捕縛する最強の罠、カミサマホイホイを邪神の封印の近くに仕掛けてあったんだった。明日確認しに行ってみよう。

古代遺跡から帰ってきた後は、両親に内緒で飼っているモンスターたちの世話だ。カモネギのはるぱーと一撃ウサギのもっふるは可愛いし、何よりはるぱーのネギは毎日とっても次の日には新しいものを持っているから無限に食べられる食料源である。めぐみんはご飯を手に入れる努力をせずに邪神の封印された祠周辺で遊びまわっているらしい。……大丈夫だろうか。めぐみんはあれで天才だから、その内邪神の封印を解いてしまうかもしれない。

私は明日邪神の封印された祠に行くことを決め、我が家への帰路に付くのだった。

この紅魔の少女に憧れを！

なぜこんなことになってしまったんだろうか……。目の前には罠にかかって目を回しながら簀巻にされている邪神（仮）、そして周囲には何か巨大な爆発の余波を受けたようになぎ倒された木々とモンスター。本当に、なぜこんなことになってしまったんだろう……。私、まだ歩き初めて1年も立っていない三歳児なんだが。

時は、数時間前に遡る。

邪神の封印を確認しに行くことを決めた私は、朝から我が姉めぐみんを尾行していた。我が姉めぐみんは里を出たあとモンスターのうろつく森を慣れたように進み、邪神の封印された祠、邪神の墓へとたどり着いた。

「～♪」

我が姉めぐみんが普段何をしているのかと思ったが、どうやら彼女はいつも邪神の封印で遊んでいたらしい。確かにあれはパズルだが、邪神の封印だと我が姉めぐみんは気づいていないんだろうか？まあ大丈夫そうだし、私は少し離れてレベル上げでもして来ようと判断して森に入ることにした。

レベルと職業、それはこの世界に存在する特異な要素である。この世界では、冒険者カードというものを作ることでレベルとスキル、職業を取得することができる。モンスターを倒して経験値を貯めればレベルが上がる。そしてレベルが上がればステータスが上がり、スキルポイントを得ることができる。そしてスキルポイントを貯めれば、魔法をはじめとしたスキルを取得することができる。また、職業とはＲＰＧにおけるジョブの概念と同じものであり、職業によって得られるスキルも大幅に変わってくるし、職業に就くのには条件として一定のステータスを必要とする。紅魔族が最強の魔法使い種族と呼ばれる所以は生まれたその時から魔法使い系の上位職、アークウィザードになることができるからなのだ。そのため紅魔の里では子供が生まれたときに、アークウィザードとして冒険者カードをつくる慣習が存在したりもする。

そんなレベルを上げるため、私は森の中でモンスターを倒していた。三歳児とはいえ成長が早い私はすでに運動も十分にできる私だが、流石に聖剣を振り回すことはできないためそけっとの修行でも使っているのは軽量化の魔法をかけた木刀だし、モンスターを倒す手段はもちろん聖剣からのビームである。

「ーこれは、モンスターとの戦いである

ーこれは、強者との戦いである

これをもって、二つの封印を解除する」

二つの封印を解除した聖剣は金色の光を纏い、発射されたビームはこちらを伺っていた一撃ウサギの群れを薙ぎ払った。

封印を解除するのに詠唱が必要なのは面倒だが、実際この聖剣エクスキャリバーは強い。戦う相手と戦う状況によって九つの封印が全解除されれば、おそらくこの世界において最強の武器であるのだろう。まあ、魔王と戦うという条件もあるので対魔王戦でなければ全解除はできないのだが。

周辺のモンスターを倒してきた私は、再び邪神の墓へと戻ってきていた。

「もうすこし、あとひとつです。」

「えぇ～」

なんと我が姉めぐみんが本当に封印を解きそうになっていた。これは止めた方がいいのだろうか。しかし、私としてはこの近くに仕掛けたカミサマホイホイの効果を確かめてみたい。めぐみんはかなり賢いし、紅魔族のなかでも特に魔力が多いためこの付近の強力な魔物でさえめぐみんを進んで襲おうとはしない。やはり、しばらく待ってみようか。

我が姉めぐみんが封印解除に熱中しているのを眺めながら考えて事をしていたら、いつの間にか我が姉めぐみんが居なくなっていた。

「やっと出られたわ。アクシズ教徒め、いつか復讐してやろうかしら。」

おっと、女性が祠から出て来た。邪神はもともとアクシズ教徒に封印されていたらしいし、アクシズ教徒に恨み言を述べている彼女が邪神で間違いないだろう。あとはカミサマホイホイに引っかかるかだが……。

祠から出て来た邪神（仮）を追いかけていると、我が姉めぐみんが漆黒の豹に襲われていた。いや、あれは猫か？そして邪神（仮）は睨み合う我が姉めぐみんと漆黒の獣の間に割り込むと、魔法の詠唱を開始した。あの詠唱はいったい……。

「エクスプロージョン!!」

黒い獣は吹き飛び、邪神（仮）が何かをすると光となって祠に封印されてしまった。我が半身とか呟いていたし、あれと合体して真の姿が明らかになったりするのだろうか。

「ありがとうございました!!」

我が姉めぐみんが漆黒の獣を吹き飛ばした魔法を教えてほしいと頼み込んで爆裂魔法とやらを教えてもらっていたが、ようやく終わって移動することにしたらしい。ふむ、この不自然な動き、やはりカミサマホイホイは作動しているらしいな……。

あ、かかった。

私が簀巻になって宙吊りにされた邪神（仮）を眺めていると、邪神（仮）はまた魔法を唱え始めた。
「デストラクション!!」
うわっ！なんだこれ!?
衝撃により意識を失った私が目を覚ますと、辺り一帯が吹き飛んで邪神（仮）も気絶していた。
まあとりあえず……、
「とったどおおおおぉ!!」

この厨二の里に邪神の加護を！

しかしこの邪神（仮）起きないな……。バケツ取ってきて水でもかけてみるか。
何度か水をかけていると、ようやく目が覚めたらしく顔を振って水を飛ばしながら、話しかけてきた。
「あのあなた、お姉さんに何をしているのかしら？」
「ようやくおきたか、じゃしんかっこかり。」
邪神（仮）はビクッと震えると、目線を逸らしながらしらばっくれた。
「じゃしん？イッタイナンノコトカシラ、オネエサンハコウマノサトニキタタダノカンコウシャヨ」
「しらばっくれなくてもいいじゃしんかっこかりよ。じゃしんかっこかりがふういんのほこらからでてきたことはかくにんしている。」
あ、暴れ始めた。なんか元気だなこいつ。この縄はチート持ちが作った奴だから絶対千切れないし、さっきの魔法で魔力も全部持ってかれてるはずなのに。
「あきらめたか……。」
「ねえあなた、お姉さんをどうするつもりなの？また封印するとかはやめてほしいんだ

けど。」
「とりあえずさとにもっていくか……。」
　今邪神（仮）を縛っている縄は何も無いところで浮かんで彼女を宙吊りにしているが、普通に手で押せばそのまま空中を滑るように移動させることができる。私はそのまま邪神（仮）を紅魔の里に持って帰ることにした　。む……、手が届かない。仕方ないから木の枝で押して移動させるか。

　紅魔の里に帰る途中、邪神（仮）が話しかけてきた。
「ねえあなた、名前はなんて言うの？」
「まりとら」
「そうなの。それでまりとらちゃん、さっきからお姉さんの事を邪神（仮）って呼んでるけど、お姉さんには怠惰と暴虐の女神ウォルバクっていう名前があるの。だからそっちで呼んでくれないかしら？邪神ってのは蔑称みたいなものだし。」
　それは悪いことをしてしまった。しかし、そうだとするとなんて呼べばいいのだろうか。
「普通にウォルバクって呼んでちょうだい。暴虐の方の私はさっき封印しちゃったし。」
「りょうかいした。たいだのけしんうぉるばく。」

「いえ、間違ってはいないんだけど……。」

何か言いたそうな怠惰の化身ウォルバクを無視して私は自宅への帰路についた。

「わがちひょいさぶろーよ、うちでこのたいだのけしんうぉるばくをかいたい。」

私が尋ねると私が父ひょいさぶろーは縄の方に興味を示しつつこう答えた。

「もといた場所に返して来い。というかどこから連れてきたんだ。」

「じゃしんのはか。ふういんがとけてでてきたところをこだいいせきにあったわなでつかまえた。」

村人を集めての緊急村会になった。

会議というものは、往々にして進まないものである。現代日本だとそれを踊ると表現したのだが、この世界ではなんというのか。

「踊ってるわね、会議。」

この世界でも踊るであっているようだ。

「そけっと」

「今日辺り貴方が何か凄いものを連れてくることは見えていたけど、逃げ出そうとしていた邪神を捕まえるなんてお手柄じゃない。」

そういえばそけっとはこの国一番の占い師だった。それではこの後どうなるのかも占えるのだろうか？そう聞くと彼女は首を横に振った。

「確かに私は大抵のことは見えるけど、流石に神の未来は見えないわよ。そもそもこれは悪魔の力を借りるスキルだしね。」

そけっとはそう言って会議の場へと視線を戻した。

「門番はどうだ。」

「使い魔にしたい。」

「邪神の守る村ってのには惹かれるな。」

「けど信仰した際の恩恵は魅力的だぞ。邪神を崇める村ってのは止めたほうがいい気もするが。」

「それなら教師はどうだ、邪神より伝わりし禁呪とかかっこよくね？」

「どうでもいいからおっぱい揉みたい。」

カオスだった。そして最後の奴は周囲の女性陣にフルボッコにされていた。

とりあえず再封印という選択肢はないらしい。色々と意見はあるが、信仰するものは一定数いるようだし多分家は猫耳神社だろう。御神体も猫耳フィギアよりは断然マシだし異論はないが……。結局すぐには決まらず、眠気に負けた私は家へと帰って床についたのだった。

数日後、結局怠惰の化身ウォルバクは里の学校に教師として赴任し、邪神より伝わりし禁呪とか神業とかを教えることになったらしい。そんな訳で私は怠惰の化身ウォルバクに会いに猫耳神社に来ていたのだが…。

「まあ信者も増えたしいいんだけどね。貴女が入学したらビシビシしごいてあげるから覚悟しなさい。」

解せぬ。

あと我が姉めぐみんが何かものすごい衝撃を受けていたのだが、いったい何だったんだろうか。

この紅魔の幼女に飛び級を！

あれから数年の時が立ち、私は十歳になったので紅魔の里の学校に入学することになった。

とは言うものの、紅魔の里の学校は十歳になった時点で入学するものであり、昔の日本の寺子屋に近いものがある。なので簡単にクラスのみなに紹介だけされて授業が始まった。というか教師は怠惰の化身ウォルバクだった。

「今日は初めてのまりとらもいることだし魔法を実演してみせるわね。みんな何が見たいかしら？」

「爆裂魔法!!」

「エクスプロージョン!!」

「どかーーーーーんってなるやつ！」

「火力こそ正義だ!!」

……っは!?

驚いて呆けてしまったが、どうやら怠惰の化身ウォルバクによって紅魔族の子供たちに火力至上主義が根付いてしまったようだ。

「この魔法はみんなも知っての通り神や爵位持ちの悪魔にも大ダメージが与えられる人類最強の攻撃手段よ。今日はこれを里の近くにある魔王城へ撃ち込みに行くわ。」

「「「はーーーーーい!!」」」

なんか魔王城へ襲撃に行くことになった。

魔王城、それは紅魔の里から山を数回越えた先にある、この世界におけるラスボスの居城。別に倒しても本人が願いを一つ叶えてもらえるだけで跡継ぎもいるのだが、いったいなぜ人々は魔王の討伐を待ち望むのだろうか。それを怠惰の化身ウォルバクに聞いてみると、

「それは魔王が死ぬと魔王城が魔王領の奥地に転移して侵攻が止まるからね。」

と言われた。魔王の幹部を全員倒さないと破れない結界があるらしいし、跡継ぎを守るためのシステムなのだろうか。しかし魔王の娘は頻繁に前線に出ているらしいがのだが……。そこまで考えたところで怠惰の化身ウォルバクに呼ばれた。どうやらテレポートの準備ができたらしい。魔王城を見るのは初めてだな……少し楽しみだ。

爆裂魔法、それは神や爵位持ちの大悪魔などにも大ダメージを与えられる人類最強の

攻撃手段である。射程や効果範囲もあらゆる魔法の中で最強であり、実際一撃で一つの戦場を勝利に導くこともできるらしい。その破壊力はまさに暴虐の名に相応しいと怠惰と暴虐の女神ウォルバクも太鼓判を押す、かの神の十八番である。

「黒より黒く闇より暗き漆黒に　我が深紅の混淆を望みたもう　覚醒のとき来たれり
無謬の境界に落ちし理　無行の歪みとなりて現出せよ　踊れ踊れ踊れ　我が力の奔流に望むは崩壊なり　並ぶ者なき崩壊なり　万象等しく灰塵に帰し　深淵より来たれ
――エクスプロージョンッッ!!」

目もくらむような閃光と空が落ちてきたかのような轟音、大地がひっくり返ったかのような衝撃波を放ち、爆裂魔法が魔王城の結界へと直撃した。

初めに行っておくが、神とはこの世界において最強クラスの存在であり、完成された存在である。ゆえにもちろん神の一柱でもある怠惰の化身ウォルバクも、爆裂魔法を打ってなお他の魔法を使う余裕があるほどの膨大な魔力と紅魔族に負けないほどの賢さを持つ。そういえば、彼女が今持っている杖は私が昨日古代遺跡で発掘した魔法を最大効率にしてさらに余った魔力で魔法の威力を上げるという効果を持つものである。

そう考えてみれば、案外この結果は見えていたのかもしれない。私がそれを予想していればと後悔すらしたし、昨日あの杖を渡してしまった運命を呪ったりもした。

……現実逃避はやめよう。つまり何が起こったのかというと魔王城を囲う結界が崩壊し、さらには爆発によって押しのけられた空気が勢いよく吹き込み竜巻が発生した。

「あ、あはは～。」

竜巻によって半壊する魔王城を目の当たりにして、怠惰の化身ウォルバクは乾いた笑いしか出せない。

……もちろんなかったことにして帰ることになった。

学校生活二日目、今日は魔道具を使って魔力制御の練習をするらしい。

「昨日は隕石の直撃によって魔王城が半壊するという事件が発生しましたが、私たちは気にせず授業を進めていくことにします。」

怠惰の化身ウォルバクは昨日のことを隕石の直撃だと説明したようだが、驚いたことにみんながそれを信じ込んでいた。……思ったよりみんなから信用されていたらしい。

今使っている魔道具は、魔力を込めただけでファイアーボールを撃てるという紅魔の里以外では希少な魔道具である。これは魔力操作を完璧にしなければまっすぐ飛ばず、こうして幼い紅魔族の魔力操作の練習に使われているらしい。

「そういえばまりとらって今レベルどれくらいなの？」

みんなが魔力切れで座り込む中ファイアーボールを連射していたら、怠惰の化身ウォルバクにそんなことを言われたので、私の冒険者カードを見せた。

「レベル４０!?もう上級冒険者と呼べるレベルじゃない。それに上級魔法もおぼえてるし……。」

その言葉に反応したクラスのみなに上級魔法を見せていると、怠惰の化身ウォルバクは待機を指示して校舎へと入っていった。

そして数分後、

「あなた、明日から最上級クラスに飛び級ね。卒業は半年後だから。」

解せぬ。

この紅魔の幼女に学校を！

ーーそれは、私にとっていつもの何の変哲もない朝の光景……、のはずだった。

担任のぷっちんが名簿を見ながら名前を読んでいく。

「出席を取る。……あるえ！かいかい！」

担任に名前を呼ばれて生徒達が返事をするなか、私はこっそりと隣の席の生徒を伺っていた。

「さきべりーー！」

その生徒はカラスの濡羽のような美しく長い黒髪を腰まで伸ばして一本にまとめ、何が楽しいのかゆらゆらと揺らしていた。

「どどんこ！ふにふら！」

またその生徒は年齢に似合わない高身長であり、私のものより一回り大きい制服とローブを華麗に着こなしている。

「…ん！おい！」

そしてその生徒はーー

「…ぐみん！おいめぐみん！聞いてんのか！」

「ひゃい!!」

名前を呼ばれていたことに気づかず、変な声を出してしまうという紅魔族一の天才にあるまじき不覚をとった私は、クスクスという笑い声の微かに聞こえるなか、頬をほのかに朱く染めて席についたのだった。

「……、ゆんゆん！」

「今ちょっと忘れてませんでしたか!?」

今日も不憫な自称ライバルの声を他所に隣に座る生徒を盗み見ると、まりとらは薄いピンクの唇に白魚のような指を当てて上品に笑っ……、

「っていうかなんでまりとらがいるんですか!?あの子めぐみんの妹ですよね!!」

その言葉に興味を惹かれて担任を見るとダメ人間として知られるソイツは頬をかき、

「あれ言ってなかったっけ?まりとらが入学前に上級魔法覚えちゃったからとりあえず半年だけ最上級クラスに入れて卒業させることにしたんだよ。」

「「「「ええーーーーーーーーー!!」」」」

そんな衝撃の言葉を発した。

朝の点呼が終わると休み時間になるが、やはりまりとらはクラスメイト達に囲まれていた。

「まりとらちゃん凄いんだね！」
「幼き時から我が師そけっとについて回っていただけだ、大したことではない。」
「どうやってレベル上げたんだい？」
「冒険者に職業を変えればレベルが上がりやすくなるからな。それで３０まで上げてからアークウィザードに転職して上級魔法を取得したんだ。あとは覚えた魔法で周囲のモンスターを倒し続けていればそれくらいにはなる。」
「ホントにめぐみんの妹？全然体格が違うじゃない。」
「それも我が師そけっとだな。倒したモンスターを焼いて食べさせて貰っていたんだ、それで経験値も結構溜まった。」
「いまレベル幾つなのよ。」
「４０だ。つい一週間前に上がったばかりだがな。」
「「「「おお～～～!!」」」」
飛び交う質問に対し流れるように答えていくまりとら。というか体格が妙にいいと思ったら貴女そんなことしてたんですね、迂闊でした。
そんなまりとらへと近づくと、私は言ってやった。
「いいですかまりとら。貴女は私の妹であり、それだけでこの私より立場が下なのです。なのであまり調子に乗らず、私の言う事は全て聞くように。」

「ちょ、ちょっとめぐみん貴女……。」
「だまりなさいゆんゆん。これは姉としては譲れぬ矜持なのです！」
そう、ゆんゆんを始め周りクラスメイト達がドン引きした顔をしていたとしても、妹との上下関係というのは絶対に守られなくてはいけないものなのだ!!
「了解した、我が姉めぐみんよ。もとより私は我が姉めぐみんを姉として慕っているのだ。その気持ちに嘘はないし、その言葉に従うのも異存は無い。」
「ぐはあっっっ!!」
「どうしたのだ？我が姉めぐみん。」
そう私を見つめるまりとらに、私は言葉が出なかった。
「大変よ。めぐみんが大人げない事を言ったら大人な返しをされてダメージを受けているわ!!」
「嬉しさやら恥ずかしさやらで顔が真っ赤ね!!」
「姉としての威厳を失って言葉がでないんだろう。」
……とりあえずそこの三人の顔は覚えたので、後で泣かしてやろうと決意した。

この生徒達に一時間目を！

――　一時間目　生物

「それでは生物の授業を始める。この生物の授業はモンスターの解剖を通して体の構造を学んだりモンスターの生態を学ぶのだが、魔法や体育、国語にも劣らない大切な授業だ。まりとら、何故かわかるか？」

その言葉にまりとらは立ち上がり

「モンスターの肉質や生態を知ることで、より高効率でモンスターを殺すためだ。」

「流石に早かったか……、5点だ。」

しょんぼりとした雰囲気を漂わせて座ったまりとらに、朝休みに早くも魅了された数人が担任へと殺意の視線を送っていた。

「それじゃあ姉のめぐみん、答えてみろ。」

「モンスターを改造した時に、溺死するブルータルアリゲーターや焼死するファイアリザードなどというかっこ悪いモンスターを作らないためです。」

「3点」

お前はそんなことも答えられないかという腹の立つ目で見られた。

「お前はそんなことも答えられないのか。」
「本当に言いやがった!!」

その後も、気を使われたのかのかまりとらは指され続けた。
「それではこの三匹のうち、尻尾が弱点なのはどれか。」
「真ん中だ。」
「よく知っていたな。めぐみんに聞いたのか？」
「尻尾を切り落としたら死んだことがある。」
……ん？

「愛くるしい姿で冒険者を誘惑して養分にする安楽少女だが、対処方法は？」
「何も聞かず考えずにぶっ殺すことです。」
……ん？

「グリフォンはどうやって飛んでいるか。まりとら、わかるか？」
「無論だ。奴らは魔法で飛んでいて、翼はあくまでその補助にすぎない。故に翼を切り落として地面に叩き落としても、風の魔法で最後の抵抗をしてくることがある。」

……んんん？

なんというか、こう……

「血しぶきの汚れが取れにくいので遠距離から魔法で仕留めるか、剣で切り裂いたあと血が吹き出るより先にバックステップで避ける必要がある。」

「あ、ああ。それではそろそろ時間なので、これで授業を終了する。」

まりとらの解答に授業が終わる頃には、私達の背筋は冷汗でぐしょぐしょだった。

「めぐみんの家どんな教育してるのよ!!」

授業が終わった途端自称ライバルによって廊下へと攫われた私は、クラスメイト達に包囲されていた。

「そうよ！まりとらちゃん凄いこと言ってたじゃない！」

「うんうん」

そう言われても私もまりとらもあまり家でじっとしているタイプではないし、別のところで遊んでいたから妹が何をしていたか私は知らないのだが…、

「はぁ……、もういいわ。」

私がそう答えると、ゆんゆんは一応納得したのか語気を緩めた。

私がクラスメイト達を論破して席に戻ると、ゆんゆんが私の机にバンと手を置いてきた。
「めぐみん、わかってるわね？」
ゆんゆんは紅魔族の長の娘にして、生真面目な学級委員である。
「なんですか？まりとらのことなら納得したはずですが。」
「そうじゃなくて!!」
「はいはいわかってますよ。ちょうど今日の朝ごはんは何かと考えていたところです。」
「そう？今日は私が朝早くから腕によりをかけて……ってどうして私が負けること前提なのよ！きょ、今日こそはめぐみんに勝って、紅魔族一の天才の座を奪って見せるんだから！」
私のために毎日ごはんを作ってきてくれる自称ライバルは、そう宣言しながら作ってきた弁当を私の机に置いた。
私は代わりに、テストの結果で手に入れたスキルアップポーションを机に置く。
「それでは私が勝負の内容を決めさせて貰いますよ。なにせスキルアップポーションは希少品、あなたの作ってきた弁当とは訳が違いますからね。」
「わ、わかってるわよ。今日もめぐみんが勝負の内容を決めていいわ！」

ちょろすぎる。

「では内容は次の身体測定で、どっちがよりコンパクトな体形をもち、可愛らしいかということで……」

「そ、そんなのズルいじゃない！そんな勝負じゃ私がめぐみんに勝てる筈がないわ！」

こいつ……！

「自分で言ったことですが、貴女にそこまで言われると腹が立ちます！同い年なんですからそこまで違いがあるはず無いでしょう！自意識過剰ですかこの子は!!」

「ちょっ！痛い、勝負は身体測定の筈でしょ！そんなに暴れたいなら体術で決めればいいのに！」

「そろそろ時間だぞ、我が姉めぐみん。」

ゆんゆんを叩いていると、まりとらが呼びかけてきた。

大丈夫、幼い頃にウォルバク先生に教わった、大魔術師になれば巨乳になれるというのは長年の調査の結果、ただの噂ではないというのは裏が取れている。

魔力の循環が血行にも影響を与えて成長を促進するのか、紅魔の里でも大魔術師といえる女性達はウォルバク先生を始めとして巨乳揃いだった。

ならば現クラスで一位であり、天才と呼ばれるほど魔力の多い私が巨乳になれる日も近いはず。そう、私はまだ、成長期が来ていないだけなのだ。

そう思案しながらまりとらに続いて保険室へと向かうと、ゆんゆんが慌ててついてきた。

「ねえめぐみん、そんなに自信があるなら普通に大きさ勝負でもいいんじゃ……？あああっ、走らないでよ。ねえ待って！」

そんな声を背中に受け、私は階段を駆け下りるのだった。

この生徒達に二時間目を！

ーー　二時間目　身体測定

私が保険室に着くと、走っていったぼっちのゆんゆんと我が姉めぐみんが既に最後尾に並んでいた。

「めぐみんさん？あの……いつも言っている通り、背伸びしたり胸を張っても意味はないわよ？計測魔法って対象の情報を読み取ってるだけだから……。泣きそうな顔をしても結果は変わら……ああっ、そんな睨まないで。」

困りきった先生を睨む我が姉めぐみんを止め、結果を聞いた。

「うん……、その……、めぐみんさんは少しだけ背が伸びたわね。じゃ、じゃあ、次はまりとらさんで……」

さり気なくぼっちのゆんゆんを抜かしたことに罪悪感を感じつつ、先生の魔法を受けると我が姉めぐみんより背が伸びていた。

「我が姉めぐみん、背が伸びなかったのは食料を得る努力を怠った貴女の責任だ。だからあまり睨まないでくれないか？」

「まりとら貴様！」

「ああっ、めぐみんさん！ストレスは発育に良くないですよ！」
「せいっ！」
　何故か襲い掛かってきたので床に投げ飛ばした。

　二時間目の途中の筈なのだが、先生がいないことをいいことに早弁をしている不良生徒を見つけた。
「我が貧相な姉めぐみんよ、仮にも授業中に早弁とは感心しないな。」
「ぶほっっ!!がはっっごほっっ！」
「ああっ！ちょっ、めぐみん大丈夫!?」
　何故か盛大にむせた我が貧相な姉めぐみんに慌てて水を飲ませるぼっちのゆんゆん、ここは妹としてお礼を言っておくべきだろう。
「いつも我が貧相な姉めぐみんの相手をしてくれてありがとう、ぼっちのゆんゆん。」
「ぼっち!?」
　何故か酷く落ち込んでしまったゆんゆんを私は慌てて慰めた。
「どうしたのだぼっちのゆんゆん！なぜそんなに落ち込んでいるんだぼっちのゆんゆん！何かあったのかぼっちのゆんゆん!?」
「やめてあげなさいまりとら！それ以上はゆんゆんが精神的に死にます！」

何故か、復活した我が貧相な姉めぐみんに止められた。しかしいかに我が貧相な姉めぐみんといえど、ゆんゆんを慰める事を諦めるわけにはいかない！……そうだ！

「ならば我が貧相な姉めぐみんもぼっちのゆんゆんを慰めるのに協力してくれ！貴女の方がぼっちのゆんゆんの事をよく知っているだろう。」

「あなたはもう黙ってなさい!!」

自分一人の方がぼっちのゆんゆんを慰めやすいからと、我が貧相な姉めぐみんにゆんゆんの机の近くから押し出されてしまった。

「ゆんゆん！落ち着いて下さいゆんゆん！あなたは私のライバルでしょう!?」

「うう……。ぼっち……、ぼっちって……。」

仕方がないので周囲を見渡していると、二人組に声をかけられた。

「あなためぐみんの妹なんでしょ!?私は紅魔族随一の弟想いふにふら！よろしくね！」

「私は紅魔族随一の……えと、どどんこ！よろしくねまりとらちゃん。」

……ふむ、名乗られては紅魔族として返さないわけにもいくまい。

「我が名はまりとら！紅魔族随一の早熟にして、聖剣を携えし者！よろしくな、ブラコンのふにふらに地味な腰巾着のどどんこ！」

「「……」」

……返事がない、どうしたのだろうか。
「なんか凄い呼び方して来たわ！どうするのよ！」
「でも本人は悪気があるわけないでもないみたいよ。ほら、今も首をかしげて……、可愛いなあ。」
「くっ！あの姉にしてこの妹ありと言うわけね……。」
二人はこちらに背を向けて何かを話しているようだ。どうすればいいのだろうか……。……っは！この気配は!!
「それじゃあ魔法についておさらいするぞ～～って、何やってんだお前ら。」
当然四人は減点された。
「……という風に、魔法には初級、中級、上級の他にも幾つかの魔法が存在している。それはお前らももうよくわかっていると思うが、今日は特殊な魔法の中でも特に威力が高い魔法を紹介していくぞ。これらは炸裂魔法、爆発魔法、爆裂魔法と呼ばれ、あまり習得する人間はいない。」
ふむふむ。
「まずは炸裂魔法。これは岩盤をも砕く威力を持つが、上級魔法を習得するのに匹敵す

るほどのスキルポイントが必要だ。使い道は土木関係で、これを持っていると偶に国の工事に呼ばれることもある。もちろん戦闘にも使えるが、国家公務員にもなるのでなければ覚えなくてもいい魔法だな。」

これは昔怠惰の化身ウォルバクが使っていた魔法か。まさかそんな特殊な魔法だったとは。

私はノートに炸裂魔法の説明を書き、ダメ人間教師ぷっちんの言葉を一言一句聞き逃さないように集中した。

「次は爆発魔法だな。これは昔伝説とまで呼ばれたアークウィザードの得意魔法で、その爆発魔法の連発の前には彼女と相対したモンスターはなすすべなく葬りさられたらしい。だが、この魔法は魔力の消費がかなり激しく一流の魔法使いでも数発撃つのが限界だろう。バケモノ級の魔力を持っていなければ覚えるのは現実的ではないな。」

爆発魔法か……、私の戦闘スタイルとはあまり合わなそうだな。

私は炸裂魔法の隣に爆発魔法と書いて、2つの下にバツを入れた。

「最後は爆裂魔法。これはウォルバク先生が得意とする魔法だな。どんな能力をも貫通してダメージを与える人類最強の攻撃手段とされるが、習得にはかなりのスキルポイントを必要とする上、その消費魔力の膨大さ故に一発も撃てないことが多い。また仮に万一撃てたとしても、ダンジョンで撃てばダンジョンそのものを崩壊させ、更にはその轟

音で周囲のモンスターを魔力の切れたところに呼び寄せてしまう。まあ、ようはネタ魔法だ！」

しかし、怠惰の化身ウォルバクは毎日のように撃っているのだが……。

同じ事を考えたのか、我が貧相な姉めぐみんも手を上げてダメ人間教師ぷっちんに質問していた。

「しかし！ウォルバク先生はよく使っている上に魔物をたくさん倒してますよ！」

「それは女神ゆえの強大な魔力を持つからだな。第一自分に被害のない位置から撃ってもあんまりカッコよくないし、撃ったあと倒れるんじゃ名乗って名を知らしめる事もできんだろう。やはり覚えるのは現実的じゃない。」

我が貧相な姉めぐみんは火力至上主義のためまだ納得していないようだが、確かにそれは紅魔族らしい納得のいく理由だった。

この生徒達に三時間目を！

ーー　三時間目　国語

「さてあなた達。紅魔族に取って文法や言葉というのはとても大事よ。なぜだかわかる？……めぐみん！紅魔族にとってなぜそれらが大事が答えてみなさい。」

　怠惰の化身ウォルバクの指名に、我が姉めぐみんはその場で立ち上がり。

「素早い詠唱、正しい発音が、魔法の制御に影響するからです。」

「不正解よ。零点ね。」

「れ、零点!?」

　我が姉めぐみんが呆然としながらフラフラと席につくと、隣の席のぼっちのゆんゆんが指名された。

「次はゆんゆん！貴女はわかる？」

「は、はいっ！古に封印された魔法や兵器には、古い文字が使われています。禁呪といった類いの魔法の解読には、それらの勉強が必要不可欠だからです！」

「二十点ね。確かにそういう側面もあるけど、今回の質問の趣旨とは違うわ。」

「二十点……、二十点かあ……。」

ぼっちのゆんゆんが我が姉めぐみんに勝てて嬉しそうな、しかし思ってたのと違うというような微妙な表情で席についた。
そんな二人を何か微笑ましい者を見るような目で見ていた怠惰の化身ウォルバクが、一人の生徒を指名した。
「あるえ！クラスで三位の実力者であるあなたなら、もうわかっているわね？」
クラスで三番目の成績だという彼女は、その場に立つと胸を張る。
「爆炎の炎使いなどのような、おかしな通り名を防ぐため。そして、戦闘前の口上をより格好いいものにし、場の空気を熱くさせるためです。」
「正解よあるえ！そう、紅魔族の通り名はとても大切なもので、あなた達もこの学校を卒業する頃には考えなくてはならないわ。そして場の、というより自分の気を高めること、これは紅魔族にとって何よりも大切なことなのよ。理由は今から説明するわね。」
そう言うと、怠惰の化身ウォルバクは黒板に人の図を書いた。
「この間そこのまりとらと古代遺跡の探索にいった時に見つけた資料に書いてあったのだけど、紅魔族というのは古の魔導大国、それもあのデストロイヤーを創った研究者が産み出した、人為的に魔法使いとしての能力を高められた人造種族だったのよ。」
「「「ええっっ!?」」」
驚くクラスの一同。しかしバーコードやナンバリングまであるんだ、私も自然に生ま

れた種族ということはないだろうとは思っていた。バーコードやナンバリングの理由は予想外だったが……。

「あなた達の体にも数字に見えるホクロや幾つかの線に見えるホクロがあるでしょ？あれがその証で、線の方はバーコードっていってその魔導大国で使われていた情報媒体なのよ。」

「あれにそんな意味が……。」

「禁忌の実験によって生まれた種族。カッコイイ……！」

はしゃぎ始める一同を他所に、怠惰の化身ウォルバクは紅魔族の特徴を図に書き込んでいった。

「まああなた達の祖先はカッコイイからと望んで改造されたみたいなんだけど、それ故にリクエストで付与された幾つかの能力が存在するわ。興奮すると目が光るのもそれの一つね。」

「一つということは、他にも隠された能力があるということですか!?」

「さすがめぐみんね。その通りよ。」

「「「「お～～～～!!」」」」

更にヒートアップする教室で、怠惰の化身ウォルバクはその隠された能力を説明し始めた。

「まずは通り名ね。実は、魔法発動の前に通り名、名前を名乗ってキーワードを口にすると魔法の威力が倍増するのよ。紅魔族じゃない私がやっても意味はないけど、私なら怠惰と暴虐の女神、ウォルバクの名において勅令す！……って詠唱の頭に付ける感じね。これが一つ目の能力。」

教室には一言一句聞き逃すまいと熱い静寂が広がり、火力至上主義の我が姉めぐみんなどはノートにもの凄い勢いでナニかを書き込んでいた。

「そして二つ目は、瞳が紅く輝いている時の魔法威力の上昇よ。普通の魔法使いでも精神が高揚した状態では魔力が活性化して魔法の威力が上昇するものだけど、紅魔族の場合はそれとは比較にならないくらいの強化率らしいわ。これが通り名と戦闘前の口上の重要性ね。もちろん里の大人達にも伝えたから、今頃は他の能力を探して古代遺跡を探索しているんじゃないかしら。」

マジか。一応欲しいものは自室にしまっておいたんだけど、正解だったな。

しかしみんながここまで喜んでくれるなら、怠惰の化身ウォルバクも巻き込んで探索して正解だったな。

私の心には、心地よい満足感が広がっていた。

この生徒達に四時間目を！

ー　四時間目　体育

校庭とは名ばかりで炎の魔法で草を焼き払っただけの、学校の前にある広場。
そこでは担任のぷっちんがマントを羽織り、三時間目の間からずっと何かを焚き上げていた。
登校した時にはもう準備ができていたようなので、担任はこのために朝早くから出勤していたのだろう。
焚き上げの白い煙が登る空には、先程からずっと暗く垂れ込めた雲が広がっている。
恐らくこのバカ担任は高価な雨呼びの護符を焚いて、この授業のためだけに前持って雲を呼んでいたのだ。
空の雲が満足のいく大きさに成長したのか担任は頷くと、
「よし！ではこれより体育改め戦闘訓練を始める！我々紅魔族において、戦闘の上で最も大切なモノは何か。ではゆんゆん！答えなさい！」
「わ、私!?えと……、えっと、戦闘で……。れ、冷静さ！何事にも動じない、冷静さが大事だと思います！」

急に指されたゆんゆんは大事だという冷静さのカケラも感じない様子でそう答えたが、
「五点！次はめぐみん！」
「五点!?」
担任に酷評されたゆんゆんが、五点……と呟きながら落ち込んでいる。
戦闘に大切なものなんて、最初から答えは決まってる！
「破壊力です！全てを蹂躙し尽くす力！火力こそが最も大切だと思うのです!!」
どうだ、とばかりに担任をみる。
「五十点！確かに火力は必要だ。十分な破壊力を持たないのであれば紅魔族の戦闘は成り立たない。しかし違う！それではたったの半分だ！」
「な……！この私が、たった五十点……!?」
「私なんて五点よ……」
落ち込む私とゆんゆんに対し、担任が成績上位者のクセにお前らにはガッカリだ、とばかりに地面に向かって唾を吐く。
「ぺっ」
「「ああっ！」」
それを見て声を上げる私達を無視して、憎たらしい担任は私達に次ぐ実力者の生徒を

指した。

「あるぇー！お前ならわかるはずだ！その左眼を覆いし眼帯が似合うお前ならば、紅魔族の戦闘において何が最も大切なのか！」

左眼に眼帯を装着したクラスメイト、脱いだら凄いと評判の、同い年とは思えない体格を持つあるえがまえに出た。

人差し指で、眼帯を下からクイッと持ち上げ

「格好良さです」

「満点だあるえ！さすがだな、スキルアップポーションをやろう！格好良さだ！我ら紅魔族の戦闘は、華がなければ成り立たない！では今から、それがどういう事かを自演するぞ。……『コール・オブ・サンダーストーム』！」

担任が雷雨を呼ぶ魔法を唱えると垂れ込めていた黒い雨雲の合間に、稲光が見え始めた。

よほど大量の魔力を込めたのか、不自然な強風が吹き荒れる。

クラスメイト達が風の強さに悲鳴を上げて髪を抑える中、担任は用意していたらしい杖を取り出して高々と天に掲げた。

「我が名はぷっちん。アークウィザードにして、上級魔法を操る者……」

担任が名乗りを上げると、杖の尖端を目掛けて雷光がはしる。

そして担任がマントを翻すと、風がそれをなびかせた。
「紅魔族随一の担任教師にして、やがては校長の座に付く者……！」
担任の声に呼応し、担任の背後へ一際大きな雷が墜ちる。
その稲光を背負い、担任が杖を構えてマントを翻した体勢のまま動きを止めた。
「「「か、格好良い!!」」」
クラスメイト達が一斉に歓声を上げる中、隣を見るとゆんゆんだけが真っ赤になった顔を両手で隠して震えていた。
「は、恥ずかしい……！」
独特な感性を持つゆんゆんがおかしな事を言っているので目を逸らし、まりとらを探す。
「Ｚｚｚ……」
「ね、寝てる……!?。」
この雷雨と強風の中立って眠るなんて、あの子はかなりの大物なのかもしれない。
「よーし！それでは好きな者同士でペアを作れ！お互いに格好良い名乗りを上げてポーズの研究に励むのだ！」
担任のその言葉に、ゆんゆんビクッと震えた。……何かの本で読んだことがある。

ぼっちにとって好きな者同士でペアを作れという言葉は、死刑宣告に等しいモノがあるとか。

ぼっちのゆんゆんもその例に漏れず、きっと担任の言葉は死刑宣告と同等に感じたのだろう。

ゆんゆんがまりとらを涙目で必死に起こそうとしているのを見ていると、

「めぐみん、組む人はいる？いないなら私と組まないかい？」

振り向くと、私と同じ十二歳とは思えないほどの巨乳が目に飛び込んでくる。

……イラッとした。

と、私の後ろでまりとらの名を呼ぶ声が聞こえてくる。

きっとゆんゆんだろう

私に声をかけてきた巨乳、あるえは準備運動のつもりなのか、首を何度か捻ったあと、その場でぴょんぴょんと飛び跳ねる。

胸が……、遅れて弾むだと……!?

……こいつは敵だ！この場で叩きのめさねば!!

「いいでしょう。私の調べた統計学的に言えば、あなたは将来凄腕の大魔法使いになる確率が高いです。ならばいまここで、どちらが上かを決めておきましょう!!」

「そんな統計学があったのっ!?」

まりとらが目をこする中ゆんゆんが律儀に突っ込んでくるが、今の私にかまってる暇はない。

と、担任が声を張り上げた。

「ペアは決まったかー？そろそろ始めるぞー!!」

……。

「あるぇ、今日はなんだか調子が悪く、体育は休ませてもらいます。先程貰ったゆんゆんの弁当に一服盛られていたのかもしれません。」

「えぇっ!?」

「なら仕方ないね。私はゆんゆん達のところに混ぜてもらうとするよ。」

あるえは私の言葉にショックを受けているゆんゆんのところへ歩いていった。

「先生、具合が悪いので今日の体育も休ませて貰います。」

「またかめぐみん。ダメに決まっているだろう。お前はまだ一度まともに体育の授業を受けていないじゃないか。今日の体育は大事な授業、仮病はゆるさんぞ。」

頭の硬い担任の前で、私はうめき声を上げながら地面に座り込んだ。

「ダメだ。この俺にそんな手は通じな……」

「ぐっ、目覚める……！このままだと、私の体に封印されたアイツが目覚めて……」

「なっ、めぐみん！まさかお前の体に封印されたアイツが目覚めるのか……!?仕方がな

いな。ちゃんと保険の先生に封印してもらうように。」
「承知しました。それでは失礼します。」
ちょろい。
私はそんな雰囲気で許可を出す担任が大好き……いや、それはないか。

「よし！それじゃあ始めていいぞー！」
そんな担任の声を背に、私は保険室に向かった。
体育の授業なんかでせっかくゆんゆんから貰ったカロリーを消費するなんてもったいない。
私は保険の先生から封印の力が込められた伝説の市販栄養剤を貰い、いつもふかふかのベットへと寝転がった。
そして静かな保険室のベットの上で、布団を首まで引っ張り上げた私は担任の言葉を思い出した。
ー爆発魔法はネタ魔法。　カッコ悪い。
私は布団を頭までかぶると、そのままふて寝するかの様に。
「せ、先生ー！雨が！雨が強くなって……！ていうかもう土砂降りですけど！先生の格好良いところはもう見たので、この雨を止めてください!!」

「校長先生の大事にしている花壇が水没しましたよ！」
「い、いかん！そういえば今日は、魔力の源たる月が最も高く昇る日だった！抑えられていた俺の魔力が溢れ出してしまったのか……！ここは俺が雨を収める！俺のことはいいから早く校舎の中へ！」
「エクスキャリバー!!」
「ああ！まりとらちゃんがなんか凄い技で雲を吹き飛ばした!?」
「助かったわ!!」
その日は何故か、まりとらが魔王を倒す夢を見た。

この生徒達に自習時間を！

四時間目が終わった後、我が姉めぐみんがスキルアップポーションを持ってぼっちのゆんゆんの周りをうろうろしていた。

きっと昼食を狙っているのだろうが、流石にどうかと思うので私の昼食を分けることにした。

「は、半分しか……あげないから……」

「まあ待て待て我が姉めぐみん。私の昼食を分けてやるからみっともない事はやめろ。」

そう言って我が姉めぐみんの顔の前でモンスターの肉とネギを串に刺して焼いたモノを振る。……しかし熊肉とネギってねぎまと呼んでいいのだろうか。

「あむあむ、んくっ…。しかし、まりとらはいったいどこからこれ持ってきたんですか？結構な量ありますけど、……はむっ。」

そんな事を口にしながらも食べるのをやめない我が姉めぐみん。どれだけ飢えているんだろうか。

「早朝に家を出て村周辺のモンスターを狩って来たのだ。あとは野生のカモネギからスリ取ったネギと一緒に刺して焼いただけだな。金はかかっていない。」
　強いモンスターの肉は美味しいので、調味料なしでも十分イケるのだ。

　そんな事を話しながら食べていると、校内放送が流れた。
『本日、午前から突然降り出した謎の大雨は、ぷっちん先生の見立てによると紅魔の里周辺に封印されている魔神の仕業に違いないとの事です。校長先生が調べたところ、確かにこの雨雲は魔力による干渉の痕跡があり、人為的に降らされた雨で間違いないとの判断が下りました。各教師はこの雨の制御のために、午後の授業は中止、生徒は大雨、強風、落雷により帰るのは危険ですので、各自校内で自習していてください。』
　ダメ人間教師ぷっちんは魔神の丘に封印されているらしい魔神に罪を押し付けたようだ。私の聖剣で切り払ってもまた降り出すまで結構かかっていたし、怠惰の化身ウォルバクの爆裂魔法なら吹き飛ばせそうなものだが……。
　私は暇になってしまったので、我が姉めぐみん達と同じ様に図書室へ向かう事にした。

　流石は紅魔の里唯一の図書室、大人も利用するだけあって、専門書からおとぎ話とレ

パートリーは多岐に及び、蔵書数もありえないほど多い。
書棚を眺めていると、幾つか面白そうな本を見つけた。
『使い魔を創る魔法』『ゴブリンでもできる自作魔法』『混沌と狂騒の女神について』
……
『使い魔を創る魔法』を読むことにしよう。なになに……。
『使い魔とは契約した時点で通常の生物の枠を外れ、ストックされた契約主の魔力を消費し生きる、一種の魔法生物と化す。』
読みながらパラパラとページをめくっていく。
『ストックできる魔力は使い魔の種族によって変動するが、例外なく使い魔になった時点でステータスが上昇する。』
ステータスは契約主の一定の割合が使い魔のそれに加算され、契約主にも使い魔の持つスキルが使用可能になることがあるらしい。
『使い魔は契約したその時から契約主に従う訳ではないので、調教する能力がないのならば卵の時点で契約することが推奨される。』
卵か、古代遺跡に幾つかあったはずだし探して見よう。
そうして私がしばらく本を読んでいると、

「ちょっとゆんゆん何それー？もしかして友達いないの？マジうけるんだけどー！」
　静かな図書室に似合わない馬鹿笑いが聞こえた。
　そちらを見ると、どうやらブラコンのふにふらがぼっちのゆんゆんに絡んでいるようだ。
「そこまでです！」
　あれは我が姉めぐみんか？
「いたいけな少女をからかい、いたぶり！その後傷心の少女に友人顔で漬け込んであれこれと要求するその企み！他の人の眼は誤魔化せても、この私にはお見通しですよ！」
「ええっ！」
　なんとブラコンのふにふらに絡み、夕食代を強請りとろうとしているようだ。
「ま、マジ意味わかんない！ちょっとゆんゆんが面白そうな本読んでたから、声かけてみただけなのに……！」
　言い方はかなり悪かったが、どうやら悪意はないらしい。
「め、めぐみんどうしたの？私はただ、声をかけられただけなんだけど……。」
　そう言って戸惑う二人に対し我が姉めぐみんは、
「いえ、なにか面白そうな匂いがしたので、暇なので首を突っ込んでみました。それに私はさっきの体育を休んでしまったので名乗れず、欲求不満が溜まっていたので。」

「「理不尽！」」

二人の叫び声を聞きつけたのか、図書室のドアが開けられた。

「おいお前らうるさいぞ、図書室では静かにしろ。あと魔神の降らした雨は止んだからな。ウォルバク先生は力比べをしたがっていたが、俺と校長の力で魔神を超えてしまったらしい。」

出てきたのはダメ人間教師のぷっちん。どうやら雨を抑えることに成功したらしい。

「先生私達には魔力が暴走したとか言ってませんでしたか？なんでも封印されてるモノの性にしちゃ可哀想ですよ。」

生徒の一人がいい加減なダメ人間教師ぷっちんに突っ込むが、

「いや里の者が封印を見に行ったところ、魔神の封印が実際に解けかけだったらしい。暴虐のウォルバク先生の封印の方も、封印が解けかけて何枚かの破片が見つかっていないらしい。魔神の封印はいつ隙間から魔神の従僕が溢れ出して来てもおかしくないし、暴虐のウォルバク先生の封印の方も解けるのは時間の問題とのことだ。何があるかわからないのでしばらくは各自一人で帰らず、複数人で帰るように。」

ダメ人間教師ぷっちんがそんな事を行ってきた。

この紅魔の姉妹の帰宅を！

わたしが買ってきた親子丼を置くと、邪神の墓が鈍く光り始めた。
「おおおおおお！マジで親子丼で封印解けんのかよ！これでようやくウォルバク様にお会いできる！封印されてから云百年！ホーストはやってやりましたよウォルバク様！」
嬉しいのか泣いているホーストに、わたしは声をかけた。
「封印解とけたなら親子丼たべていい？」
「おお、いいぞいいぞ！よくやったこめっこ！どうせなら金をやるからカツ丼も食ってこい！」
「げんちはとった！」
光りが収まってからホーストが差し出してきた親子丼を食べるわたし。
「あれ？光っただけで何も起きねえぞ、確かに封印は解けたっぽいのに。」
親子丼を食べていると、しっこくのまじゅうがヨタヨタとわたしに近づいてきた。
……とても小さかったけど。

「おかしいなあ、確かに封印は解けてるっぽいんだが。」

どうやら親子丼を狙っているらしい。わたしのもとまでたどり着いたきょうぼうなしっこくのまじゅうは、なんとわたしにおそい掛かってきた！

「ウォルバクさまーーーー！いませんかーーーー？」

引っ掻いたり噛み付いたりしてきたきょうぼうなまじゅうを押さえつけて噛み付いてやると、しっこくのまじゅうは降参したのか動かなくなった。これは今日のお夕飯にしよう！

「はぁ、もしかして違う封印だったのか？ってこめっこ何してんだ？そんな子猫に噛み付いたりして。」

「せんりひんだからあげないよ？」

「いらねえよ。そいつはこめっこが飼ってやんな。それよりこめっこ、この村で他に封印されてる所ってないか？」

封印されてるところ？

「あとはくぐつの女神が封印されたとこと、なんとかしんの丘ってところ。」

「きっとそこだ！よし、明日もここに集合な！そのなんとか神の丘ってとこに行ってみるか！」

「カツ丼」

「あ～、それは明日な。明日また来たらお金やっから。」
「しかたないなあ。」
そう言って、わたしとホーストは別れたのだった。

――――――――――――――

私と我が姉めぐみんが帰ろうとしていると、ぼっちのゆんゆんがぼっちらしい面倒くさい理由を付けて一緒に帰ろうとしてきたため、一緒に帰ることになった。

「ね、ねえまりとらちゃん、お腹減ってない？ちょうどそこに喫茶店があるんだけど……。」
「いいぞ」
そんな事を言い出すぼっちのゆんゆん。どうせぼっちだし友達と一緒に喫茶店に行くのが夢だとかそんなところだろうと思って了承すると、我が姉めぐみんがケチを付けて来た。
「ちょっと待って下さい！何故まりとらだけを誘うんですか!?」
「え、だってめぐみんはお金持ってないから来ないとか言いそうだし……」
「それならまりとらだって持ってるわけないでしょう！同じ家に住んでいるんですから

ゆんゆんはかなりお金を持っていそうだしいいか。
我が姉めぐみんが小さくガッツポーズをとった。奢らせたかったのだろうか？まあ
「そ、そうなの!?それじゃあ私が二人分奢るから、三人でいこう？」
確かに古代の金貨とか以外のエリス硬貨は持っていないので頷く。
！」

「いらっしゃい！紅魔族随一の、我が喫茶店にようこそ！ひょいさぶろーさん所のめぐみんと古代の探究者（エンシェントシーカー）じゃないか。話は聞いたぞ、また古代遺跡でなんか見つけたんだって？すごいじゃないか！しかし外食とは珍しいな、何にするんだ？」
「カロリーが高くて腹持ちがいいもので。」
「パフェをください。」
「ちょっ！めぐみんそれ女の子のメニューの選び方じゃないわよ、まりとらを見習って！あ、店長さん……、私はオススメのもので……」
席に座ると、ぼっちのゆんゆんが話しかけてきた。
「そ、それでまりとらちゃん。え、古代の探究者（エンシェントシーカー）ってなに？」
「あ、それは私も気になってました。」
何かといわれても……

「毎日古代遺跡に潜っていたらいつの間にか二つ名がついてた。」
「そういえば、昔からまりとらは外で遊んでいましたね。」
「そけっとさんについていってお肉もらっていただけじゃなかったんだね。」

　そんな話をしていると、店主がメニューを差し出してきた。
「オススメか。今日のおすすめは『白龍皇の加護を受けしシチュー』と『赤龍帝の魔弾風カラシスパゲティだな。」
「カラシスパゲティで」
「私はこの『魔神に捧げられし子羊肉のサンドイッチでお願いします。」
「私は『強欲に囚われし悪魔のゴールデンパフェ』を頼む。」
「あいよ！赤龍帝の魔弾風カラシスパと魔神に捧げられし子羊肉のサンドイッチ、強欲に囚われし悪魔のゴールデンパフェだな。」
「カラシスパゲティで！」
　我が姉めぐみんとぼっちのゆんゆんは恋バナなどをしていたが、私はそれを無視してパフェを食べていた。
　……すごくおいしかった。

「帰りましたよー！」
「ただいま」
「お姉ちゃん達お帰り！」
　家に帰ると、我が妹こめっこが出迎えてくれた。我が姉めぐみんのお下がりのローブを引きずっているあたり、どうやら遊びに行っていたらしい。
「あーあー…。ローブが泥だらけじゃないですか。お留守番を頼んでいたのに、また何処かへ遊びに行っていたんですか？」
　そういって我が妹こめっこのローブについた泥を払う我が姉めぐみん。
「うん！新聞屋の兄ちゃんはげきたいしたから、そのあと遊びに行った！」
「ほう。今日も勝ちましたか。流石我が妹です。」
「うん！『もうみっかもかたいものをたべてないんです』って言ったらお食事券をくれたよ。」
　そういってお食事券を差し出す我が妹こめっこ。我が家は貧乏だが、我が姉めぐみん以外は普通に一人でも生きていけそうな気がする。
「姉ちゃんからいい匂いがする。」
「おっと、流石は我が妹。お土産ですよ。魔神に捧げられし子羊肉のサンドイッチ！さあ、腹がはち切れんばかりに喰うがいいです！」

「すごい！魔神になった気分！じゃあさっき捕まえた晩ごはんは明日の朝ごはんにしよう！」

　また我が妹こめっこが何か捕まえてきたらしい。この前捕まえてきたセミを見せられた時は、慌ててモンスター肉を狩ってきたものだが、今回はせめてイナゴまでにして欲しい。

「こめっこ、晩ごはんとはなんですか？何を捕まえてきたのです？」

　そういう我が姉めぐみんの声は震えている、同じことを思い出していたようだ。

「見る？しとうの末に倒した、きょうぼうなしっこくの魔獣！」

　そう言って我が妹こめっこが持ってきたのは……

「にゃ～」

　何故かぐったりとした、黒い子猫だった。

「これはまた大物を捕まえてきましたね。」

「うん！ていこうしてきたけど、かじったら大人しくなった！」

「勝ったのはいいですが、なんでもかじってはいけませんよ？毒を持つ奴もいるんですから。」

　そんな話をしながら我が姉めぐみんが子猫を受け取ると、怯えたように胸元に縋り付いていた。どんな目にあったのだろう。

結局その子猫は、我が姉めぐみんが自室に持って帰った。……食べるのだろうか？

この紅魔の少女に新たな名を！

　ー教室内がざわついている。
「ああ、なんて愛らしいの！」
「可愛いらしさが止まらないわ！」
「にゃあ～ん」
「「きゃあああああ!!」」
　というのも、我が姉めぐみんが昨日の黒猫を連れてきた事が原因だ。
「あのまま家に置いて行くと、帰ってきたころにはこめっこに食べられていてもおかしく無いですからね。」
　確かに我が妹こめっこはとてもこの黒猫を食べたがっていた。我が姉めぐみんには内緒で結構焼肉あげていたんだが、足りなかったのだろうか？
　しかし、この学校はペット持ち込み禁止ではなかっただろうか？
「ーーー不許可」
　やはり断られたか。しかし我が姉めぐみんは諦めていないらしく、何やらダメ人間教

師ぷっちんへと言い募っていた。
「先生、これは私の使い魔なのです。この子は我が魔力を糧に生きているので、私から離れるともれなく死んでしまいます」
　何やら適当なことを言って誤魔化そうとしているらしい。
「不許可。まだ魔法も使えないのに使い魔とは…。学校は使い魔禁止！おやつ禁止！さぁ、元いた場所に返してきなさい」
「先生、これは我が魂の片割れです。故にもう1人の私なのです！力の大半は私が持って行きましたが、これはれっきとしたもう1人の私なのです！我々は一心同体。離れるわけにはいかないのです！」
　ちょっと格好いい言葉を言われれば直ぐに靡くと噂のダメ人間教師ぷっちんの弱点をついた見事な作戦だ。流石は我が姉めぐみん、紅魔族一の天才の名は伊達ではないらしい。
「…もう1人のお前が抱かれるのを嫌がってるように見えるが」
「私、そろそろ反抗期なので」
　黒猫がむずがって我が姉めぐみんの懐から飛び出し、壁で爪を研ぎ始めた。
「…お前の片割れが本能のままに爪を研いでいるわけだが」
「紅魔族はいつでも戦いに備え、爪をとぐもの。私が知性と理性の大半を持って行った

ため、もう1人の私はあのように力と野性に満ちた獣のように…」
　普段の我が姉めぐみんは怠惰に過ごしていたような……。
「いいよ」
　まじか！
「そう、一見あのように愛くるしいもう1人の私ですが、その中身は…。いいんですか？」
「面白そうだからこのままでいいよ」
　流石はダメ人間教師ぷっちん、そんな適当な理由で許可をだすとは。
「ちょっとめぐみん！トイレは決められたところでしなさい！ほら、ここよここ！ここでシーするの！そう、よく出来ました！偉いわね、めぐみんは！」
「……」
「めぐみんの食べ残し、ここに置いたままだと臭わない？日陰の方がいいよ」
「……」
「あーっ！もう！めぐみんダメじゃない！あちこちで爪を研いだりしないで！そんな可愛い顔して首を傾けてもダメよ！ダメ…。あぁ、もう！可愛いなぁ本物のめぐみんは！」

「あああああああああーっ！」

突然我が知性の姉めぐみんが机をひっくり返した。

「きゃーっ！ニセめぐみんが凶暴に！愛らしさだけじゃなく、知性と理性まで片割れに取られちゃったの!?」

「誰がニセめぐみんですか！こっちが本物ですよ！あちこちでめぐみんめぐみんいうのはやめてください！」

「ど、どうしたのよめぐみん。めぐみんがあっちのめぐみんの片割れだって言ったのよ？知性と理性のめぐみんと、力と野性のめぐみんなんでしょ？」

「めぐみんめぐみんめぐみんめぐみん、あちこちで私の名前を呼ばれるのは我慢の限界なんですよ！そいつに名前をつけてください！」

そういきり立つ我が知性の姉めぐみんに対しぼっちのゆんゆんが我が野生の姉めぐみんを抱いたまま。

「そんなこと言われても、もうめぐみんで定着しちゃったし…。ほら、私もやっとめぐみんを抱けるようになったの！…もう、いっそのこと、この子じゃなくて、めぐみんのほうが名前を書変え痛い痛い！」

「裏切り者！ライバルの名前が変わってもいいんですか！というか、今日1日で学校に入学してから今日までよりも、よほどめぐみんという名前が呼ばれてる気がしますよ

！」
「大丈夫だ。私は我が知性の姉めぐみんの名前がもっふるに変わっても変わらず尊敬すると誓おう。」
　うむ、いい名前だ。
「変わりませんよ！というかそれってあなたが飼ってる一撃ウサギの名前でしょうが！」
「しかしもっふるはもういないぞ？我が知性の姉もっふる二世も一週間前に美味しい美味しいと食べていたじゃないか。」
　あれは美味しかったな。
「あのステーキがそうだったのですか!?」
　驚愕に目を見開く我が知性の姉もっふる二世。
「きっともっふる二世も美味しいに違いない。」
「私を食べる気ですか!?」
　まあ確かに食べ応えはないだろう。
「胸も貧相だしな。」
「喧嘩売ってんですかこの妹は!!!」
「せいっ！」

掴みかかってきたので投げ飛ばした。

この古代遺跡に探索者を！

「ねえまりとら、今日は何処を探すの？」
　放課後、私は怠惰の化身ウォルバクを誘って里の近くにある古代遺跡を探索に来ていた。
「今日は地下第二十三層だな。排気口を通って隔壁を回避するルートを見つけたんだ。」
「確か隔壁は魔法障壁で破れなかったのよね？」
「ああ、探索に入った里の大人達も何もできずに帰ってきた。隔壁の解除パネルが見つからない以上、排気口を通って行くしかないだろう。」
　エレベーターらしき装置の内部に繋がる排気口に入ったが、何故か怠惰の化身ウォルバクがついてこない。
「あの、先生胸がつかえて通れないんだけど。」
「『カースドライトニング』」
「……どうして先生はいきなり上級魔法を撃たれたのかしら？」
　黒猫へと変化して通って来た怠惰の化身ウォルバクは若干焦げていた。

「うざかった」
「うざっ…！貴方ねえ……」
「いいから行くぞ。」
停止しているエレベーターの上に飛び降りて上の蓋を開けて中を覗いていると、ドスンという音がした。
「大丈夫か？」
「いてて、先生最近運動不足だから着地失敗しちゃった。」
しかし凄い音だったな。エレベーターの天井も若干凹んでいるし、どれだけ重かったんだか…
「まりとら……？」
「別に怠惰の化身ウォルバクの体重が気になってなんかいないぞ？」
「『フレイムスピア（カースドライトニング）』！」
危なかった。こんな閉鎖空間で上級魔法撃つとか怠惰の化身ウォルバクは頭でもイカれたのだろうか。
「まりとら……？あまり体重のことには触れない様に」
ふむ、そういえば前世で女性の体重は触れてはいけないタブーだと聞いたことがある。謝らなくてはなるまい。

「すまなかったな。怠惰と肥満の化身ウォルバク。」
「『クリスタルレイン（カタトゥンボトゥルエノ）』！」
魔法の相殺にここで見つけた古代魔法まで使うことになった。一体何が悪かったのだろうか？

角の先には警備用ゴーレムが一体配置され、どのような手段を使っているのかエネルギーが切れることもなく、不規則に周囲を見回している。
これまでの経験からするとアレは超高感度のセンサーが積まれており、半径5メートル以内に近づけば魔力弾を放って攻撃してくる。
「（せいっ！）」
円盤型のセンサーの下に搭載された砲台、その砲口を塞いでしまえば魔力を充填することも出来無くなり、無効化することができる。
あまり古代の遺物を破壊したくはない、うまく当たればいいんだが……、
「よし当たった。」
「流石まりとらね。先生関心しちゃうわ。」
そうだな、怠惰の化身ウォルバクは火力厨の脳筋魔法使いだからな。

そんなこんなで数十分ほど古代遺跡の地下を進むと、ようやく目的の場所へと辿り着いた。
「ここが目的地、第二生物実験区画だ。」
「えっと、先生まだまりとらの目的を聞いてないんだけど、何を探しに来たの?」
そういえば言っていなかったな。
「もう少しだ。この奥だな。」

次の扉を抜けると、大量の生体ポッドとその中に浮かぶ肉塊が並んでいた。
「なに、これ……!」
「文字通りの生物実験区画だ。ここは保管庫だな。まあ安心しろ、人体実験区画は地上三階らしいからな。」
「やってなかった訳じゃないのね……。」

ここか。あまりに危険過ぎて時間停止の封印をかけて封印した者たちが眠るという、生物兵器封印保管庫。
「そ、そんな危険な物を取りに来たの!?」
「そうだ。私の目的はこの研究所でも最高クラスの生物兵器。

――神や悪魔、強大な力や特性を持つ存在を捕食するモノ
――何処までも成長し、最後には世界を喰い尽くす最強の竜
――暴食竜タイラントドラゴン
その卵が、私の目標だ。」

この怠惰の化身とお喋りを！

タイラントドラゴン、それは最強の生物兵器にして、最凶のドラゴン。
そしてその卵こそ、今私の抱えている黒い塊の正体である。
「まあくっそ硬い上にコロナタイトぶち込んでも孵化しないくらい孵化に大量のエネルギーが必要らしいがな。」
「いや、卵がどうやってコロナタイト食べるのよ。」
一度実際にやってみるか……、
「よし見せてやろう。見逃すなよ……？」
黒曜石のような漆黒の卵を、近くにあった生物兵器へとぐいぐい押し付ける。
そうすると、卵が鈍く光ってゆっくりと生物兵器を取り込み始めた。
「うわあ……」
「魔法も吸収するし、衝撃とかも吸収するから盾としても使えるぞ。何より使い魔契約すれば私が死んだときに一緒に死ぬからな。後世に遺恨を残すこともない。」
「へえ～、意外といろいろ考えていたのね。それにしても先生、ちょっと面白くなってきたわ。」

そんなことを言いながら卵を生物兵器に押し付けまくる怠惰の化身ウォルバク。
まあここに悪意ある何者かが侵入したときの為に、生物兵器群は纏めて排除しておこうと思っていたからちょうどいいか。
「そういえば、今回どうして先生を連れてきたのかしら？貴女なら一人で十分だったでしょうに」
「いや……、生物兵器を一掃するのに爆裂魔法使って貰いたくてな……。」
「貴女実は馬鹿でしょ!!」

まあ流石にそれは冗談として……、
「怠惰の化身ウォルバクよ。我が姉めぐみんの連れていたクロ、アレはお前だな？」
「っ！そう……、気づいていたのね」
まあ、私は怠惰の化身ウォルバクの半身を見た事があるからな。
「どうするつもりだ？力の残滓の影響は既に出ている。怠惰の化身ウォルバクの力で抑えられてはいるが、直に表面化するぞ。」
「それは……」
そもそも怠惰とはなすべきことをなさないこと。それはつまり先延ばしに過ぎず、溜め込まれた力はいずれ暴発する。

「……」

怠惰と暴虐とはつまりそういう意味であり、実際に怠惰と暴虐の女神ウォルバクの加護とはそういうものだ。力の蓄積と解放、それを本質として持つ女神の力がここまでばら撒かれ、何も起きないとは考えづらかった。

「……」

そもそもあの黒猫を取り込んで全てを制御すれば、怠惰と暴虐の女神ウォルバクは封印から復活するであろう独身の魔神と同格に渡り合えるはず。未だに言葉を発しない怠惰の化身ウォルバクは、どんな考えを持っているのだろうか。

「……」

「……」

「……」

「どうしようかしら？」

「『カースドライトニング』！」

ぶっ殺してやろうかコイツ。

猫耳神社、それは里の中でも中心部に近いところにある、怠惰と暴虐の猫神を祀った神社。すなわち、邪神ウォルバクを祀った神社である。

「というわけで頼んだ。ちょくちょく見に来るから妙な事はするなよ。」
「わかってるわよ。貴女には恩もあるしね。」
そこは怠惰の化身ウォルバクの住居であり、間違いなく危険物であるタイラントドラゴンの卵を隠すのには丁度いいだろう。
「早くお前を孵してやるからな、ちょいさー。」
呼びかけながら魔力を送れば、縁側に置かれたちょいさーが小さく震えた気がした。

この荒ぶるモンスター達に鉄槌を！

炎に雷、風、氷、色彩豊かな魔法がとび、荒ぶるモンスター達が根こそぎ吹き飛ばされてゆく。

「うむ、この分なら昼食前には終わりそうだな。」

と満足気に頷くのはぼっちのゆんゆんの父親であり、最近あまりにも名前を呼ばれないせいで紅魔の里では名前を呼んではいけないあの人と呼ばれ始めた、名前を読んではいけない里長。

つまり現在行われているのは、先日危惧したとおりに暴虐の力の残滓によって凶暴化し暴れ始めたモンスターの間引きである。

本来なら生徒は来てはいけない筈のこの催しに私が参加しているのは、

「ねえねえ今どんな気持ち。ついこの間警告されて時間もあったのに結局モンスターが自分のせいで凶暴化してるのってどんな気持ち。」

「あの、真顔棒読みで煽らないでくれるかしら？」

こうして怠惰の化身ウォルバクにＮＤＫをくらわせるためだ。

「警告されたにされたのに何もしなかった怠惰の化身ウォルバクさんマジ怠惰の化身っ

すね。」
「だから棒読みで煽らないでよ！ていうか貴女そんなキャラじゃないでしょうに……。」
「それもそうだな。」
仕方がない、一旦煽るのはやめるとするか。
「それで貴女、結局何しに来たのよ、サボり？」
失礼な。
「私はただこうして怠惰の化身ウォルバクを煽りに来ただけだ。警告を受けたにもかかわらず何もしなかった怠惰と肥満の化身年増のウォルバクをな。」
「『デストラクション（メドローア）』！」
人に向かって炸裂魔法とか何考えてんだ怠惰の化身ウォルバクは。更年期障害か？」
「聞こえてるわよ！『ファイアトルネード』」
「『メドローア』」
どうやら口に出していたらしい。しかし怠惰の化身ウォルバクは我が姉めぐみんに大魔法使いと名乗っていたが、意外とたいしたことないのだろうか？」
「『トルネード（メドローア）』！」
おっと、まだ口に出してしまったらしい。
それにしてもこの魔法、むちゃくちゃ使い勝手いいな。

「あ、ウォルバク様じゃないですか。何まりとらと喧嘩してるんですか？」
しばらく魔法を撃ちあっていたら、一人の紅魔族が話しかけてきた。
この男は隣にある靴屋の息子で我が姉めぐみんにとっては近所の兄ちゃん的な立場の……
「ストーカーニートぶっころリーじゃないか。ストーカーニートぶっころリーも間引きに来ていたのか？」
「す、ストーカーニートはやめてくれないかな。いつも通りそけっとの情報を集めに出かけようとしたら、親父に暇なら間引きの手伝いに行けって連れて来られたんだよ。」
あ、怠惰の化身ウォルバクの顔が微妙に引き攣ってる。
「まあそけっとも来てるみたいだし、これを気にそけっとに格好いい姿を見せてアピールしようと思うんだ。まりとらはそけっとがどっちに行ったか知らないかい？」
清々しい程に気持ち悪い男である。
「あっちに行ったぞ。今なら間に合うだろう。」
「ありがとうまりとら！今度なにかお裾分けにいくよ！」
そう言ってストーカーニートぶっころリーは走っていった。
「そけっとの担当って反対側よね？」

「あっちに一撃熊がいった。今ならまだ間に合うだろうな。誰がとは言っていない。」

　モンスターを蹴散らしながら怠惰の化身ウォルバクと周囲を探索していると、気付けば邪神の墓の近くへと来ていた。

「そういえば、怠惰の化身ウォルバクはアクシズ教徒に封印されたんだったな。何があったんだ？」

　前から気になっていたことを聞いてみると、怠惰の化身ウォルバクは苦笑いしながら頬をポリポリと掻いて

「ちょっとした価値観の相違よ。アクシズ教の女神アクアってのは知り合いじゃないけど。多分まだ若い神かなんでしょうね。」

「ジェネレーションギャップと言う奴か。」

「まあそんな感じね。先生みたいな割りと古参の神はあまり悪魔に憎しみとかないから私みたいに悪魔と契約してたりするのも結構いるんだけど、若い子は悪魔を毛嫌いする子が多いのよ。」

　神の中にも派閥があるということか？

「どちらかと言うと清濁併せ飲むかどうかってことね。神の本能としては悪魔に嫌悪感くらいは出るけど長く神やってたら無くなってるし、悪魔に信徒がいるからって封印す

るのはまだ若くて嫌悪感バリバリの潔癖な子くらいよ。悪魔に嫌悪感持ってるのは本能に忠実な子と魂の管理担当位だけど、よっぽど頭が悪くないとそういう事はしないわよ。」

「魂の管理担当と言うと、幸福の女神エリスか。」

「悪魔に持ってかれた魂は特例扱いで仕事も増えるし、見付けたら殺す位の殺意を持っていてもおかしくないわね。」

神界の裏話を聞いてしまったが、そんなことを話していいのだろうか。

と、そろそろ邪神の墓か。

「くそっ、ウォルバク様は何処に封印されてんだ?」

ん、今何か聞こえたような……。

ハンドサインで怠惰の化身ウォルバクへそこに待機するよう指示してから近づいてみると……

「カツ丼おいしいしいね!」

「ああもう食え食え!今日は俺もヤケ食いしてやる!」

我が妹こめっこが悪魔に餌付けされていた。

しかしどうしてあんな状況に……

「ホースト?貴方、ホーストじゃない!?」

「ウォルバク様!?」

……え？

この悪魔にご主人様を！

「貴方ホーストよね？えっと……、どうしてここにいるのかしら。アーネスは？」
「それがオークの群れに襲われた時にハグレまして……」
目の前で、ゴツい悪魔が一見か弱く見える怠惰の化身ウォルバクに平伏している。
「バクバク」
そしてそんなシュールな光景を無視してカツ丼をかっ食らう我が妹こめっこ、
……カオスだ。

「ウォルバク様何処にいらっしゃったんすか？ここの封印にも魔神の丘の封印にもいなかったっすよね？」
「七年前に封印が解けてからはここで教師してるのよ、……ちょっともう一回言ってくれるかしら？」
……今気になる単語を口にしたような。
「ホースト貴方、ここと魔神の丘で何かしたかしら？」
「ウォルバク様を探して封印解いちゃったんすけど、マズかったですかね？」

……。

「ギルティ」

ふん縛って里の大人達に突き出すか。

里の真ん中、集会場としても利用される名前を呼んではいけない里長の家で、黒い大きな角と翼を持った悪魔が土下座していた。

「ほらちゃんと謝りなさい。今回の件は私にも非はあるし、土下座で勘弁して貰うから。」

……というか、土下座させられていた。

完全にやらかした息子の母親と化した怠惰のオカンウォルバクと一緒に頭を下げた苦労人のホーストは、そのまま華麗なる土下座に移行させられていた。

「特に困ることもないしいいよ」

そしてなんか軽い感じで許されていた。

それでいいのか名前を読んではいけない里長……。

「それで結局苦労人のホーストはなんで我が妹こめっこに丼ぶり飯を渡していたんだ？」

「あら、それは私も気になってたわ。」
「いやそれが……」
　我が妹こめっこを家に返して苦労人のホーストに詳しい話を聞くと、苦労人のホーストは怠惰と暴虐の女神ウォルバクが封印されているという邪神の墓に来てみたのは良いものの封印が解けずに困っていたらしい。
「それで偶然邪神の墓へ遊びに来ていた我が妹こめっこと出会ったのか。」
「まあそういうこった。それにしても紅魔族ってのはやっぱ凄いんだな。あんな小さいのに俺様でも解けなかった封印を解いちまうなんて。」
「まあ我が妹こめっこは天才だから。」
　我が姉めぐみんより才能というか適性が優れているみたいだし、何より厨二病的価値観に染まっていない幼年期の方が知能は低くても賢さは上みたいなところがあるからな。
「貴方ロリコンだったのね。知らなかったわ。」
「いえ、そういう訳では……」
　しかし怠惰の化身ウォルバクに対してだけ露骨に態度変わるな苦労人のロリコンホースト。相棒というか相方らしいアーネスとかいうのはどうなのだろうか。
「それでも気に入っているんでしょう？」

「まあでもアイツにはかなり高い悪魔使いの才能も感じますし、将来アイツに召喚されるのも悪くないかもしんないっすね。」
　と言いつつ照れくさそうに頬をポリポリとかく苦労人のホースト。正直こんなゴツい男悪魔にツンデレをやられても誰得なのでやめてほしい。
「それじゃあ貴方のこと忘れるくらいには必要じゃない訳だし、ここで契約解除しちゃうからこめっこちゃんと契約しちゃえば？」
「え!?」
　驚く苦労人のホースト。
「やあねえ。冗談に決まってるじゃない。」
「そ、そうっすよね。」
　ほっと息をつく苦労人のホーストに、私は今思いついた事を話してみる。
「だが我が姉めぐみんのこともあるし、苦労人のホーストに子守をして貰うのはどうだろう。」
「いや、まあそれくらいなら……」
「決まりね。」
　そんなわけで、苦労人のホーストは我が妹こめっこの子守をする事になった。